

テイル解釈における認知処理

村尾治彦

1. はじめに

～テイルという形式が取る意味は細かく見ればかなり多種多様であるが、大きく分けるとアスペクトの観点から以下の例のように4つに分類される：動作の持続(1)、結果状態の持続(2)、状態持続(3)、過去に起こった出来事を現在に関連付けて述べる、いわゆる経験(4)（本稿では三原1997に倣い効力持続と呼ぶことにする）¹

- (1) a. 太郎が走っている。
b. 太郎が本を読んでいる。
c. 雨が降っている。
d. 次郎がイスを壊している。
e. イスを並べている。
- (2) a. 電気が点いている。
b. 花子が到着している。
c. 二人は結婚している。
d. 花瓶が割れている。
e. 魚が川で死んでいる。
- (3) a. 彼は芸にたけている。
b. あの山は高く聳えている。
- (4) a. 当時彼はこの会社で働いている。
b. この作家は若い頃にこの作品を書いている。

しかしよく指摘されているように、これら4つのタイプは互いに静的な関係にあるのではなく、通常は動作の持続を表す動詞が結果状態の持続になったり(5)、結果状態の持続を表す動詞が動作持続になったり(6)、あるいは

動作持続や結果状態の持続を表す動詞が効力持続になったり (7) と、同じタイプの動詞であってもそのテイル形の解釈は一定ではない。

- (5) a. イスが壊されている。
 b. 体育館にイスが並べられている。
- (6) a. 毎日多くの人が交通事故で死んでいる。
 b. 最近多くの日本人が外国人と結婚している。
 c. 父はこの頃6時前には起きている。(寺村1984: 130)
- (7) a. 僕は高校生の頃に太宰を読んでいる。
 b. 二人は15年前に結婚している。
 c. この有名な俳優は7年前に死んでいる。

(4)、(7) を観察していてすぐに気が付くことであるが、(4) の効力持続タイプについては、このタイプに使用される固有の動詞タイプはなく、効力持続タイプ以外で使われている動詞が「～年前に」とか、「当時」とか「若い頃」のような過去時を指す副詞表現と共起するときこのタイプになる傾向がある。

本稿では、このようなテイルが付く文の解釈が動的に変化する現象の背後にある要因を考察し、4つのタイプのテイルの解釈にそれぞれ個別にその場限りの説明を与えるのではなく、一見無秩序に見える現象に統一的な視点から原理的に、体系だった説明が与えられることを認知文法の立場から主張する。

最終的には、効力持続タイプには基本的にどのタイプの動詞でも生起できることから、通常動作持続と結果状態の持続の解釈になる場合の認知処理及び、結果状態の持続を表す動詞が動作持続になったり、動作持続が結果状態の持続になったりする現象における認知処理が同次元のものであり、そこで表されている同じ概念内容を異なる認知処理をした結果が(4)や(7)のような効力持続の解釈の場合であることを主張する。

2. 認知文法

認知文法理論は、極限られた道具立てを使って言語の特性やあらゆる言語現象を統一的な視点で、体系的に捉えようとする点において、他の科学的な言語理論と同じ立場を取る。ただ生成文法のような理論と異なるのは、その道具立てにできるだけ言語固有のものを認めず、純粋に我々人間の一般的認

知能力に根ざした、心理的に妥当だと思われるものを使おうとしていることである。認知文法の提唱者である Langacker は、一般認知能力に還元できる道具立てを用い、極めて広範な英語や他の言語の現象を体系的に説明している。日本語の研究においてもこのような立場から、山梨 (1995、2000)、Uehara(1998)を始め多くの研究が見られる。以下では認知文法理論で使われている道具立ての内、本稿に関連すると思われるものを概観しておく。

認知文法では、文法に存在する要素として、①：実際に現れる特定の言語表現、②：①から抽象化して得られたスキーマ構造、及び③：①と②に関わる様々なカテゴリー化の関係の3つのみを認めている(内容制約 (content requirement))。①と②はそれぞれ意味的 (semantic) 構造、音韻的 (phonological) 構造、そして両者から成る記号的 (symbolic) 構造を含む。意味的構造 (semantic structure) というのは言語的使用の目的のために概念化 (conceptualization) されたもので、この「概念化」の過程において認知主体による様々な認知処理が行われる。そしてこれらが慣習化 (conventionalize) され、定着 (entrench) したものが言語単位 (unit) として確立される。従って言語は「慣習的な言語的単位の構造化された目録」として定義される。尚、「構造化された」というのは、ある言語単位が他の言語単位の構成要素になっているということを指す。

このように文法や言語というものを規定していくと、従来言語学の研究テーマとなってきた文法範疇や文法関係、様々なレベルの言語単位の意味構造、文法的振る舞いは、我々認知主体の動的な認知処理に大きく依存するものであると言える。つまり認知文法では、我々人間が認知能力を使って外界の事物をどのように捉えるか (construal) の過程が最も重視されるべきものなのである。

では実際に一般認知能力の反映という観点から文法的な概念がどのように規定されるのか見てみよう。例えば認知文法では名詞、動詞、形容詞等の文法範疇は、概念化によって得られた「言語的意味」によって定義されている。認知文法では一般に、「意味」というのは概念的 content と認知主体によるその内容の捉え方 (construal) から構成されるものを指す。従って各文法範疇はそれぞれの概念的 content (conceptual content) だけによって決定されるのではなく、概念的 content と認知主体によるその内容の捉え方 (construal) によって決定されると考える。そのため同じ概念 content を持っても、それをどのように捉えるか (construal) によって異なる文法範疇となるのである。

ここで言及している「概念的 content」というのは認知文法では認知ドメイン (cognitive domain) と呼ばれている。「認知ドメイン」は意味を規定する際にその基盤として必ず呼び起こされ、意味はこの「認知ドメイン」との関係で相対的に規定される。「認知ドメイン」には空間、時間、色彩空間、臭い、味などの基本的なものから、それらを基盤にして作り上げられたもっと抽象的な、複合的なものまで様々ある。認知ドメインに対して認知主体がどのような捉え方をするかによって最終的に意味が規定される。

「捉え方 (construal)」には様々な認知能力が反映されている。中でも重要なものは、「スコープの設定」、「プロファイル部の選択」、「プロファイル部内の構造に際立ちの違いを与える能力」である。「スコープの設定」とは、認知ドメインにアクセスし、実際に意味を規定するのにそのドメイン内のどの部分を利用するかを決定することである。この意味の規定に直接関わる部分を直接的スコープ (immediate scope) という。そしてそれを含む認知ドメイン全体を最大スコープ (maximal scope) と呼ぶ。直接的スコープ内で特に認知的際立ちを与えられ焦点化されている部分をプロファイル (profile) という。² プロファイルされたものが複数のものの関係を表すような場合は、さらに認知的際立ちの違いを認定する作業が行われる (→プロファイル部内の構造に際立ちの違いを与える能力)。

では、名詞、動詞、形容詞、副詞などどのように規定されるのか。認知文法では言語表現がプロファイルするものはモノ (thing) と関係 (relation) の二つであると考えている。名詞はモノをプロファイルする。「モノ」というのは単なる物理的物体を指すのではなく、何らかの認知ドメインにおける領域 (region) と考えている。ここでいう「領域」とは、互いに関連付けられた存在物の集合のことである。³ 認知文法では、モノ、存在物は図 1 a、b のように表示する。尚、太線はプロファイル部であることを表す。⁴

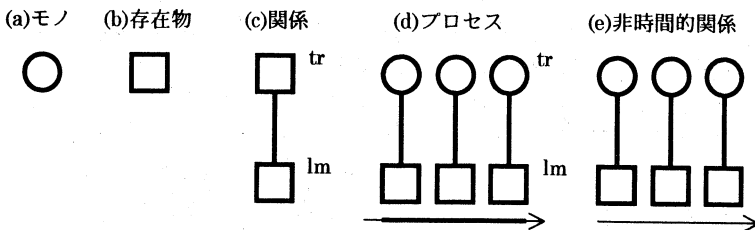


図 1

動詞、形容詞、副詞などは、複数の存在物間の関連付けによって形成される「関係」をプロファイルする。⁵ ここでも註3であげた存在物間の「関連付け」という認知操作が行われており、それによって抽象的な領域が形成されるが、動詞、形容詞、副詞などの関係概念は、領域の方ではなく領域内の関係をプロファイルする。形容詞、副詞などの静的な関係は、図1(c)のように表示される。ここでは、関係を表すコンポーネントが一つ存在することによって静的な関係を捉えている。このような関係を非時間的な関係(atemporal relation)と呼ぶ。形容詞と副詞は共に非時間的な関係をプロファイルするが、両者はトラジェクターとランドマークの規定の仕方によって区別される。形容詞はトラジェクターにモノを取り、ランドマークには何らかの存在物を取る。副詞はトラジェクターに関係を取る。

動詞のような動的な関係は、プロセス(process)をプロファイルする。プロセスとは、時間的に分布している複数の図1(c)のような関係のコンポーネントを、順次的走査(sequential scanning)することによって捉えられた図1(d)のような関係のことである。走査とは、簡単に言えば、ある対象(基準)から別の対象(目標)へ視線を動かせ、両者の位置関係等を比較しながら目標である対象を評価する認知処理のことである。⁶ 順次的走査とは、この処理を時間軸に沿って一つのコンポーネントから別のコンポーネントへと順番に行うものである。各段階での走査によって得られた情報は、その段階だけ保持され、その次の段階に持ち越されることはなく、次の走査ではまた新たな情報が集積される。こうして各段階で順番に新たな情報を入力することによって全体としての出来事の変化・推移を捉えるのである。⁷ このためプロセスには必ず関係を表すコンポーネントが複数存在する。また、時間の流れが関係するので、表示内には時間軸を表す矢印が設定され、それがプロファイルされている。⁸

走査にはもう一種類、累加的走査(summary scanning)というのがある。これは、順番に行われる走査によって得られた情報が各走査の段階だけ保持されるのではなく、その後の走査まで累積されていくもので、全ての走査が完了した時に、得られた情報全体に(時間の概念を捨象して)同時にアクセスすることによって、ゲシュタルト的に一つのまとまりとして捉える処理である。累加的走査が適応されて捉えられた関係は時間のプロファイルがない。このタイプは図1(e)として簡略化して表示してある。複数のコンポーネントから成る非時間的な関係を表す非定形の動詞などにこの累加的走査が反映されている。

認知文法では以上のように文法範疇が定義される。重要なのは範疇を決定するのはもっぱらプロファイルを中心とした「捉え方」の違いによるものであるということである。

以下3節では1節で取り上げたテイル構文に関わる問題にいかんにか認知主体の認知処理過程が反映されているかを論じていくことにする。尚、本節で提示した道具立てはテイル構文を説明するためだけに特別に作り出されたものではなく、これらの現象とは独立して一般認知能力に動機付けられたものであり、他の言語現象においても、また様々な言語においても広範に反映されていると考えられているものである。

3. 認知文法によるテイルの分析

3. 1 日本語のテイル形と英語の ing 形

従来多くの研究では、テイルを初めから動作や出来事の持続、結果状態の持続を表す機能を持つ形式動詞として扱い、どのタイプの動詞と共起するとのタイプの継続を表すようになるのかということにもっぱら分析の主眼が置かれていた。

しかし、以下の例のように、英語の進行形が表す意味とそれに対応すると思われるテイル形の意味を比較すると、テイルそのものの概念化をもう少し詳細に議論しておく必要があると思われる。そうすることにより、なぜあるタイプの動詞がテイルと結びつくと特定のタイプの持続を表すようになるのかがより明白になると思われるからである。

- (8) a. John is running.
b. 太郎が走っている。
- (9) a. They are breaking the house.
b. 彼らは家を壊している。
- (10) a. The last train is arriving.
b. 終電が到着している。
- (11) a. The vase is breaking.
b. 花瓶が壊れている。

例えば、(8)は「走る」というある一定の期間活動が続き、また元の状態に戻るような意味を表すタイプで、Vendler (1967)の活動 (activity) 動詞、ないしは金田一 (1950)の継続動詞と呼ばれるものである。(9)の「壊す」

は Vendler の達成 (accomplishment) 動詞で、ある活動の結果、最終的な状態に至るものを描写するタイプである。金田一はこのタイプを特に別だてしてはいないが、後で見るように活動動詞と達成動詞では受動化されたときのテイルの解釈において違いが見られるので、Vendler に従い活動と達成は区別することにする。この活動と達成動詞のタイプは少なくとも能動文ではどちらも主体の動作の持続を表している。そして日本語でも英語でもそれは同じである。ところが、問題は (10)、(11) のような Vendler でいう到達 (achievement) 動詞、金田一の瞬間動詞にあたるタイプの動詞に生じる。このタイプはある状態から別の状態への瞬時的変化、もしくは行為の終了時点に焦点をあてたものである。英語ではこのタイプの動詞が進行形で表されると、その動詞が表す出来事に向かって進行中であること (結果への推移) を表すが、日本語のテイル形の場合は既に起こった出来事 (変化結果) が現在も持続していることを表す。従って日本語のテイルと英語の ing は共になんらかの持続を表すが、その表面的な類似からは見えにくい本質的な違いがあるようだ。この違いを説明するためには英語の ing の機能と比較しながらテイルの機能を分析する必要があり、それによってテイルの本質が浮き彫りになると思われる。

そこでまず比較的テイルの機能を詳しく定義している寺村 (1984)、吉川千鶴子 (1995) を取り上げてみよう。寺村はテイルの定義を「既然の結果が現在存在していること」としている。吉川千鶴子はさらにこの寺村の定義に加え、テの意義を考慮して次のように述べている。

日本語のテイル形は、完了のタの中立形 (三上 1963 : 8) であるテの部分「既に然る」という既然相を表し、イルの部分「状態相」、ルの部分「未了」を表しているから、「既然の結果が現在存在し (寺村 1982 : 127)、未了であること」という意味である。 (吉川千鶴子 1995 : 184)

これらの定義から動詞のタイプによってテイルの解釈が変わるのはどうかを考えてみよう。「歩く」などの活動動詞のテイル形が動作持続になるのは、「歩く」という活動が発話時の段階では既に存在しており、それが現在も持続しているという解釈が得られるからということになる。「壊す」などの達成動詞の場合も同様に、家などを壊すという活動が発話時の段階では既に存在しており、それが現在も持続しているという解釈が得られるからということになる。ただし、達成動詞は主語の活動だけでなくその活動によって

引き起こされる目的語の結果状態も表すので、テイル形の場合なぜ目的語の結果状態ではなく、主語の活動の持続を表すのかという点については説明が必要であろう。これに関しては後で議論することにする。「到着する」などの到達動詞の場合は、変化結果までの過程は背景化されているので、テイル形になると、到着するという位置変化が発話時の段階では既に存在しており、その結果状態が現在も持続しているという解釈になるのである。

では次に Langacker の一連の研究 (1990、1991、1999) による英語の進行形についての説明を見てみよう。Langacker は先述のように、認知処理過程の観点から言語の特性や言語現象を説明しようとしている。Langacker によれば *ing* の機能は、その概念化のドメインとなる時間ドメイン上に基盤として存在する完了プロセス (perfective process) (これは *ing* が付く動詞語幹によってプロファイルされるもの) を直接的スコープに限り、プロセスの両端をそのスコープから外すことによって、未完了プロセス (imperfective process) にするものであるという。この操作によって進行形の持つ一時性の意味がでてくることになる。⁹ このことは図2に示してある。

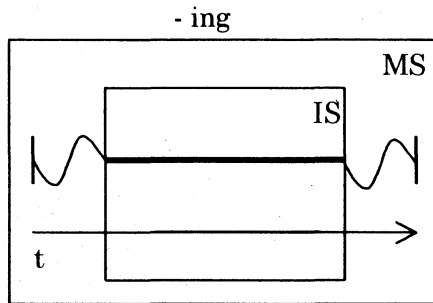


図2

Langacker のこの説明に従えば、活動や達成動詞の場合、*ing* は *walk* や *break* という完了プロセスの両端を直接的スコープから外すことによって未完了プロセスにするため、ある時点で始まったプロセスが現在まだ終了せず進行していることを表すのだと言える。*arrive* のような到達動詞を *ing* 形にした場合は、主体の位置変化という結果状態はプロファイルがかかる直接的スコープから外れ、背景化され、結果状態までの途中の段階が

profile されることになる。このため日本語のテイル形のように結果状態の持続とはならず、結果状態に向かっての推移を表すのだと言える。まとめると、英語の進行形において到達動詞が結果状態に向かっての推移を表すのは、直接的スコープから終端を外す機能が ing にあるからであると言える。

以上のように、日本語のテイルは英語の ing と同様結果的には持続という意味を持っていても、その意味を生み出す概念化の過程が ing とは違っているようである。このためにテイルや ing が付く動詞タイプによっては日本語と英語で持続の解釈が変わってくるのである。従ってテイル形の本質を見極めるためには、テイルが概念化の結果持っている表面的な機能をおさえておくだけではなく、その機能を持つに至るテイルの概念化の過程においてどのような認知処理が行われて、それが言語化にどう反映されているのかを考慮する必要がある。そのためには2節で取り上げた Langacker の認知文法が最も適切な説明を与えてくれる枠組みとして援用される必要があると思われる。上でみた吉川千鶴子の説明は従来の研究の中ではより詳しいテイルの定義であり、テイルの本質を考えさせてくれる一つのステップにはなるが、これだけでは1節であげたテイル形のタイプを統一的に原理的に扱うことはできない。以下では認知文法の立場からテイルの機能の説明と動詞のタイプによる意味解釈の違いを説明したいと思う。

3. 2 テイルのスキーマと主体化

テイルは前節でみたように、已然相を表すテと現在の状態の持続を表すイルから成り立っているが、従来よく言われているように、元々人間や動物など有生のものの場所・空間的な存在を表す本動詞としてのイルがテと結びついて文法化され、相を表す文法的要素になったものである。¹⁰本節ではまずこの文法化の過程においてどのような認知能力が反映され、どのような概念化の過程を経て相的な意味を持つようになったのかについて一つの考え方を提示してみよう。

以下の例において、(12) はイルが本動詞として使われているのもので、猫・太郎（トラジェクター）の場所・空間的な存在を表す。

- (12)a. 庭に猫がいる。
- b. 太郎が公園にいる。
- (13)a. その子は静かに座っている。
- b. その絵を持っていてよ。

- c. カエルがじっとしている。
- (14)a. 太郎が本を読んでいる。
- b. 雨が降っている。
- c. イスが壊れている。
- d. 当時彼はこの会社で働いている。

「本が机の上にある」とか「道ばたに石ころがある」などはイルと同様場所・空間的な存在を表すが、トラジェクターが無生物であり、他からの何らかの力が加わらない限りその位置にずっと存在し続けることになる。しかしイルの場合、そのトラジェクターは無生物ではないので、プロトタイプ的にはトラジェクターの持つ内在的なエネルギーによってある場所・空間での存在がコントロールされる。つまり、ある基準時の前後はその場所に存在しない可能性が少なからずあるわけである。これは図3に示してある。図3の太線の矢印はトラジェクターの場所・空間的存在が直接的スコープ内で持続していることを表す。トラジェクターを含むこの部分がプロファイルされており、(12)の言語表現の中心を成している。Cは直接的スコープ内の状況を概念化している概念化者を表し、そこから出ている点線の矢印は走査などの認知処理を表す。この部分は理論上直接的スコープの外にあり、プロファイルの対象にはならない。

(13)はこの本動詞イルから文法化が起り、相的機能を表す語になったものであるが、(14)に比べるとまだ本動詞としての機能をいくらか残しているようである。従ってイルがテに前接するプロセスの持続を表すというより、そのプロセスで表される行為をしながらある場所・空間での存在を維持していることを表しているようである。例えば(13)のa、b、cはそれぞれ、座りながら、持ちながら、じっとしながら、その場での存在を維持しているというニュアンスがある。その証拠に(13)はイルの前に「その場に」とか「そこに」を挿入してもおかしくない。

- (15)a. その子は静かに座ってその場にいる。
- b. 君、その絵を持ってそこにいてよ。
- c. カエルがじっとしてその場にいる。

この時、図4に示されているように、場所・空間に位置することを維持することによって「座る」とか「持つ」とか「じっとする」という行為が持続

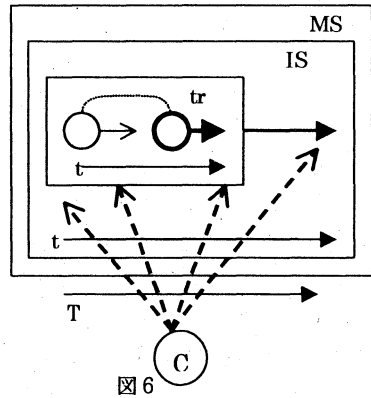
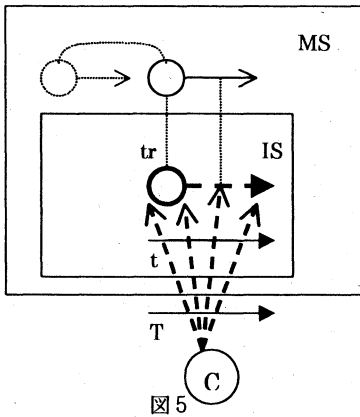
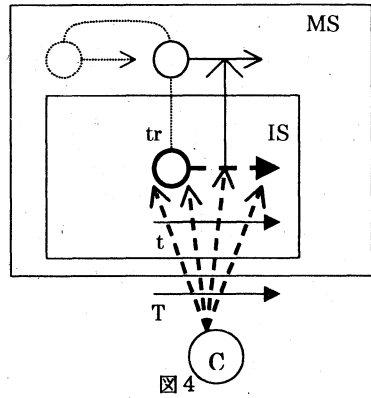
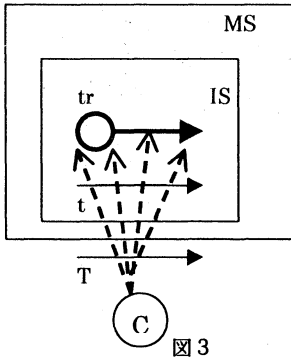
すると考えられる。なぜなら「その子」や「君」、「カエル」がそれぞれ位置している場所からいなくなれば、「座る」という行為や「持つ」、「じっとする」という行為は存在しなくなる、ないしは少なくとも認知主体の視界からは消え、概念化されなくなる。直接スコープの外にある点線の円・矢印及びプロファイルされていない円・矢印で表されているプロセスは、「座る」とか「持つ」とか「じっとする」という行為を表し、点線で表されている方が認知処理時間以前、実線で表されている方が認知処理時間（この場合現在時）のものを表す。この二つは対応線（点線）によって同一のものであることが表される。認知処理時間以前には点線だったものが認知処理時間には実線になっていることによって、認知処理時間には「座る」とか「持つ」とか「じっとする」という行為が既に起こっていることが表される。これによってテが表す既然の意味を捉えている。直接的スコープ内のプロファイルされたプロセスから垂直軸を出ている矢印は、その子・カエル（トラジェクター）の場所・空間での存在維持によって矢印の先のプロセスが維持されていることを表す。(13)の例は本動詞イルの意味が一部希薄化（bleaching）し、テと結びついて相的な機能を持つようになっているので、プロファイルされているプロセスの矢印が点線になっている。

さらに文法化が進んだ(14)は図5に示されているように、ほとんど本動詞が持っている意味が希薄化し、相的な機能を果たす形式動詞になっている。その証拠にイルの前に「その場に」を入れると文全体がおかしくなる。

- (16)a. ?太郎が本を読んでその場にいる。
 b. *雨が降ってその場にいる。
 c. *イスが壊れてその場にいる。
 d. *当時彼はこの会社で働いてその場にいる。

ここまで来るとイルの意味は何ら具体的な概念内容を持たず、「トラジェクターの何らかの関係への参与が持続している」という極めて抽象的なプロセス概念だけが直接的スコープ内に残る。そしてテに前接する「関係」がこの抽象的なスキーマを特定化（elaboration）し、持続の具体的な内容を表すのである。¹¹ 従ってテに前接する「関係」とイルの表す「関係」は特定性の違い以外は同じものになっている。このため図5ではプロファイルされた「関係」とプロファイルされていないプロセスの間に対応線が引かれている。ただしテに前接する「関係」はテと結びつくことによって既然を表しているこ

とを忘れてはならない。従って最終的にイルが抽象的に表すのは、既然のプロセスが持続するということになり、この結果イルとテが連結したテイルという形で文法化されることになる。テイルのスキーマは図6のように表される。¹²



ここで注意しなければならないのは、イルのスキーマが表す抽象的な持続を特定化しているのはテに前接する「関係」全体であって、その中のトラジェクターだけではないことである。例えば、「太郎が走っている」などでは、イルに直接関わっているのは太郎というトラジェクターではなく、「太郎が走る」である。つまりテイル構文の構造は実際は、[[太郎が走る]ている]である。このことはテイル構文の主語に無生物を取る文を考えてみればよりはっきりする。例えば、「木が倒れている」は言えても「木がイル」は言えないことから、イルというプロセスに直接関与しているのは「木が倒れる」という「関係」自体であって「木」はその「関係」を通して間接的にしか関わっていないことが分かる。従って論理的にはテイルそのもののトラジェクターはプロセス全体である。

しかしテイル構文の文法的な主語は実際そのプロセスの中のトラジェクターである太郎や木である。このことは認知文法の立場では全く問題ない。なぜなら論理的に直接ある関係に関与すると思われる要素が実際はプロファイルされずに主語や目的語の地位を与えられない現象は日常言語にはありふれている。ここで起こっていることは「活性化領域 (active zone) とプロファイル (profile) のずれ (discrepancy)」という認知的にとっても一般的な現象なのである。例えば (17) の例を見てみよう。

- (17)a. 花子が瞬きをしている。
b. あなたの犬が私の猫を噛んだ。

(17a) では、「瞬き」という行為に直接関わる論理的主語は花子自体ではなく、彼女の目の部分である。にも関わらず主語は「花子」である。同様に (b) では、「噛む」という行為に直接関与しているのは犬の歯や顎の部分であるし、噛まれる対象も猫全体ではなく、その体の一部である。直接この行為に関わる部分を「活性化領域 (active zone)」という。そして実際にプロファイルされているのは、メトニミー的に指示される「花子」、「犬」、「猫」で、これが主語や目的語になっている。Langacker (1995, 1999) では、Don is likely to leave. のような繰り上げ構文 (raising construction) においてもこの観点から分析を行っている。つまり、実際に likely に論理的に直接関与する要素は to leave という関係概念である。それでも主語という地位を与えられているのはメトニミー的に、間接的にその関係概念に関わっている Don である。

従って、主語や目的語がプロフィールするものが、常にそれらが生起するプロフィールされた「関係」概念に直接参与する訳ではない。主語、目的語の問題は「認知的際立ち」の問題である。最も際立ちのある要素がたまたまプロフィールされた関係に論理的に直接参与するものであれば、論理関係と主語、目的語の地位が一致するだけである。¹³ 認知文法では、文法関係を際立ちの違い (tr/lm) によって規定するという発想の一つの根拠としてこのことを捉えている。

このような認知文法の立場を取れば、テイル構文の文法的主語がイルの表すプロセスに直接関わってなくても全く問題ないのである。テイルが表す関係概念は間接的にしかテに前接する「関係」内のトラジェクターには関わらないので、トラジェクターの性質には何ら制約を与えない。この状態を「透明 (transparency)」という。主語、目的語は特定の意味役割によって規定されるものではなく、「際立ち」によって規定されるものであるので、テイルの表す関係概念に直接関与していない要素に（最も際立ちのある要素である）トラジェクターの候補者として選択の範囲が広がっていても全く問題ない。このことから帰結として、テイル構文に現れる文法的主語は、テに前接するプロセスのトラジェクターとして生起できるものであれば生物でなくても何でも構わなくなるといえる。「壊れる」の場合であれば、このトラジェクターに來られるものであれば何だって「壊れている」全体のトラジェクターになれるのである。¹⁴ このために本動詞イルはそのトラジェクターにくるものに制約があるが、テイルには制約がないのである。

3. 3 動詞タイプと持続解釈

前節で述べたように、イルと主述関係を結んでいるのは、イルの表す抽象的な持続と間接的に関わっている、～テで表される「関係」内のトラジェクターである。前節ではもっぱら Vendler の活動自動詞を対象にテイルのスキーマを考えてきたが、他動詞の場合も同じようである。先行研究でもよく言われているように、対象の変化のないもっぱら主体の行為を表す活動の他動詞だけでなく、主体の行為と対象の状態変化を表す達成動詞においても動作持続の解釈が与えられ、イルが間接的に主述関係を結んでいるのは変化主体であるランドマークではなく、トラジェクターであることが分かる。また、テイルが付くと結果状態の持続を表す到達動詞タイプも持続の解釈が異なるだけで、その変化主体であるトラジェクターがイルと間接的に主述関係を結ぶ。状態持続になる動詞タイプも同様である。

- (18)a. 太郎が本を読んでいる。
b. 次郎がイスを壊している。
c. 花子が到着している。
d. あの山は高く聳えている。

従ってこのことから (19) として仮説を立てることができる。

(19)テイルという述語と主述関係を結ぶ主語がプロファイルするのは、テに前接する「関係」のトラジェクターである。

持続の解釈タイプの変化は、トラジェクターが直接関わるプロセスが「歩く」などの行為ないしは「雨が降る」などの過程を表すのか、「到着する」、「壊れる」などの状態変化を表すかに依存する。「歩く」、「読む」、「降る」などは行為が開始した時点と発話時が同じものとして概念化できるものである。従って図7に示されるように、認知主体が順次的走査を行って概念化する場合、行為の起こる前と起こった後では明らかに違いがあり、それを変化と捉えるが、その後は時間が経過してもその各段階で同じデータのの繰り返しとなり、それが時間的幅のある一つの線として捉えられることになる。従ってテイル構文では動作の持続となる。

「到着する」、「死ぬ」、「壊れる」などは、その出来事が起こる前と起こった後ではやはりされるデータの違いがあり、変化と捉えられるが、その後時間経過と共に同一の走査過程の中でそれと同じデータがされることはない。従ってこの変化の部分を幅のある線として捉えることはできない。変化の前後の部分（例えば壊れていない状態と壊れている状態）は同じデータのが可能なのでそれを走査しながら幅のある線として捉えることが可能である。変化後をプロファイルするのがテイル構文であり、これはテという言語形式によって反映される。従って、テイル構文で使われる時は～テによって変化の発生（既然）が表されるが、その後時間の経過と共に同じ変化が起こることはなく、状態変化後の状態が続くという意味になると考えられる。ちなみに寺村（1984）が指摘しているように、結果状態の持続タイプにおいては、眼前でその変化自体を捉えているわけではない。発話時にはすでに変化後の状態が眼前にあるのである。従って変化の認知は、「死」なら「死」、「壊れる」なら「壊れる」に関して我々の持つ百科辞典的知識と眼前の状況との心的な比較によって成されていると言える。

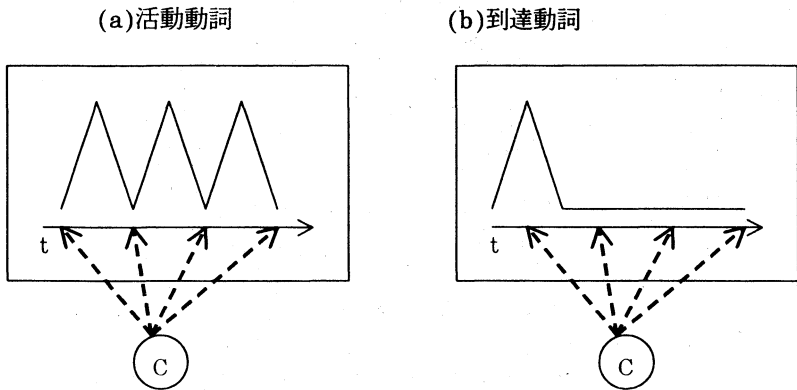


図7

では次に例文 (5)~(7) で見たような、同じ動詞タイプが異なる持続解釈を持つようになる事例を考えてみよう。もう一度以下に同じ例文をあげておく。

- (5) a. イスが壊されている。
 b. 体育館にイスが並べられている。
- (6) a. 毎日多くの人が交通事故で死んでいる。
 b. 最近多くの日本人が外国人と結婚している。
 c. 父はこの頃6時前には起きている。(寺村1984: 130)
- (7) a. 僕は高校生の頃に太宰を読んでいる。
 b. 二人は15年前に結婚している。
 c. この有名な俳優は7年前に死んでいる。

まず(5 a、b)の例から始めよう。「太郎が次郎を殴っている。/次郎は殴られている。」のように、活動他動詞は受動文にしても動作持続の意味は変わらないが、(5 a、b)のような達成動詞の場合は受動文にすると動作持続だけでなく結果状態の持続の意味にも取れることはよく指摘されていることである。このことを本稿の立場から説明するとすれば、「壊される」のような受動文では、「壊す」というプロセスを基盤にしてその同じベース上においてランドマークだったものがトラジェクターの地位を与えられ、テイルと間接的に主述関係を持つものが変化対象になるからだと言える。¹⁵ そう

なると到達動詞がテイル構文で使われる場合と同じ状況になり、結果状態の持続の解釈が生じると言える。動作持続解釈に取られる時はこの同じベース上でトラジェクター（能動文でのランドマーク）と行為を表す部分にプロファイルがかかる時である。トラジェクターの変化部はプロファイルから外れる。「殴る」のような活動他動詞の場合は、ランドマークの状態変化は含意しない動詞であるので、ランドマークが表すものが受動文でトラジェクターの地位を与えられていても、結果的には図7(a)と同じデータ入力の仕事が行われることになる。能動文との違いは単に主体の行為を対象の側からの視点で眺めたというだけになる。そのため動作持続の解釈は変わらないと言える。

次に(6)について考えてみよう。ここで使われている動詞は全て到達動詞であり、通常はテイル構文では結果状態の持続になるものであるが、(6)の場合動作や出来事が継続していることを表している。このタイプの事例については先行研究でよく取り上げられているものであるが、その中でも寺村(1984)の説明を例にとりて見よう。到達動詞がテイル構文の中で動作・出来事の継続を表すのは、同じ主体の行為が繰り返される時(6c)や複数の個体が同じ行為に関わる場合(6a、b)である。寺村の説明によると、到達動詞が表す出来事は、一つ一つは始まりと終わりのはっきりした点であるが、それが何回も繰り返し起こる時、全体としては点の連続である線として捉えられるためであるということである。(6c)と(6a、b)の違いは繰り返される行為・出来事が同じ主体による複数の行為によるものか異なる複数の個体によって行われるものなのかということである。

寺村のこの説明は、本稿での認知処理過程を重視した言語分析という立場になじむものである。寺村は一切言及はしていないが、この説明はまさに順次の走査という認知処理である。一つの点を基準にし、そして次の点と比較をし、その差違をデータとして入力する。これを順次点から点へと繰り返す。そしてこの走査の結果、一連の点の並びが一つの線として認識される。ただし、それぞれの点と同じものとして認識されなければ走査しても線として捉えられない。例えば(6c)では主体や起きる時間は毎回同じでも細かな状況は毎回異なる。あわてて起きたかもしれないし、目覚めが悪かったかもしれない。(6a)では、毎回死ぬ人は違うし、交通事故のタイプもそれぞれ異なるかもしれない。しかし、我々認知主体は一回一回の動作・出来事の細かな差違を捨象して「死ぬ」、「結婚する」、「起きる」といった行為・出来事をスキーマとして捉えることによって同じタイプのものとして範疇化するこ

とができる。この処理によって互いに同じ点として捉えられる。そしてこの点から点へ順次的走査をすることによって一つの線として認識され、これが動作持続読みに繋がる。

最後に(7)ないしは(4)のような効力持続タイプを考えてみよう。このタイプは結果状態の持続に一見似ているが、三原(1997)でも言及されているように、主に次の二点において異なっている。まず一つは、結果状態の持続のタイプは変化主体(ないしは変化後の状態)が発話時に存在しているのに対し、効力持続タイプは変化主体や行為主体(ないしはその行為)が現在存在している必要はない。例えば次の(20)を見てみよう。(20a)は結果状態の持続であるが、変化主体が発話時において存在している場合に使われる。それに対し、(20b、c)のような効力持続タイプは、過去において「結婚する」とか「太宰を読む」という行為が起こっているが、それが発話時において存続している必要はない。

(20)a. イスが壊れている。

b. 二人は15年前に結婚している。

c. 僕は高校生の頃に太宰を読んでいる。

もう一つの違いは、効力持続タイプは動詞のタイプに関わらず効力持続の解釈が持てる点である。例文(4)、(7)を参照されたい。

さて、従来の研究ではこのような効力持続タイプを、過去に起こった出来事の効力が発話時において持続しているとか、過去の事実を現在に関連付けて捉えたものといった、経験ないしは回顧的な用法として説明されてきたものである。しかし、過去に起こった出来事の効力が発話時において持続しているとか、過去の事実を現在に関連付けて捉えたものといった定義が意味するところは一体何であろうか。この意味を深く追求している研究はあまり見られないし、ましてやこの意味を追求し、さらにそれと動作持続、結果状態の持続のタイプと関連付けて体系的に統一的な視点から捉えた研究はないようである。

このような効力持続タイプは一見無秩序で、他のテイルのタイプと同一の視点から捉えることが困難な事例のようである。しかし、本稿での枠組みに従えば、図6で示したテイルのスキーマをベースにして拡張された事例だと捉えることが可能である。具体的には、テイルのイルは本動詞イルからの文法化により相的な機能を持つ語になったものだと考えてきたが、効力持続の

事例はこれがさらに文法化されて、テイルが表す意味には何ら具体的な持続の意味はなく、単に認知主体の走査という認知活動の部分のみが意味として残り、言語表現に反映されているものだと考える。Langacker(1998、1999)はこのような過程を主体化 (subjectification) と呼ぶ。Langacker による主体化とは以下のようなものである。

... an *objective* relationship fades away, leaving behind a *subjective* relationship that was originally *immanent* in it (i.e. inherent in its conceptualization). (Langacker 1998: 75)

objective relationship とは直接的スコープ内にある概念化の対象となる関係であり、subjective relationship とは認知主体による概念化の過程に存在する主体的な関係である。つまり、概念化の対象が持つ具体的な意味は希薄化し、その対象を概念化する時の過程に元々存在する認知処理によって捉えられる主体的な関係のみが言語化の対象として残ることを主体化と呼ぶ。もちろん主体化とそうでないものとの明確な境界はなく、段階的なものである。動作持続、結果状態の持続はこの途中の段階であると言える。Langacker は文法化とはこの主体化が一つの要因となって起こるものであると捉え、英語の前置詞 across や、be going to、法助動詞などをこの主体化の例として取り上げている。日本語のテイルの場合もこの主体化が反映されているものと本稿では仮定する。

ではより具体的にテイルの場合を以下の図8として表して説明していこう。¹⁶

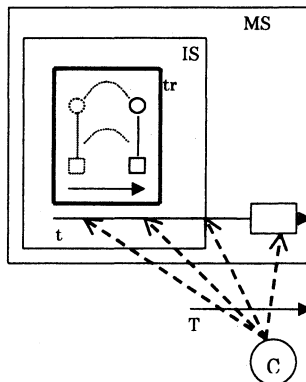


図8

動作持続、結果状態の持続の場合は図6で見たように、どんなに抽象的な意味であっても直接的スコープ内に持続の意味が残っており、それがプロフィールされている。しかし、効力持続では図8に示すようにもはやプロフィールされる対象として直接的スコープ内に持続の意味はない。持続の意味が残っているのは、スコープ外にある認知主体によるメンタルな走査 (mental scanning) という認知活動においてのみである。この持続の関係はもっぱら認知主体による概念化の過程において存在するものなので、主体的に捉えられるものである。この関係は本動詞イルや動作継続・結果状態の持続にも元々存在している認知処理過程に存在するものであり (図3~6を参照)、効力持続構文ではこの関係が言語化に反映されたものと考えられる。ただし、認知主体や認知処理過程は言語化に反映されるが、直接的スコープ内にはないのでプロフィールはされない。プロフィールされるのは直接的スコープ内のトラジェクターである。¹⁷

動作持続、結果状態の持続のテイルの場合は、直接的スコープ内に抽象的ではあるが、持続の関係がプロフィールされており、テに前接するどのような「関係」がその持続を具体化するかによって動作持続になるか結果状態持続になるかが変わっていた。しかし、効力持続においては、直接的スコープ内には具体的であれ、抽象的であれ何ら持続の関係はなく、持続の関係はスコープの外の主体的なものだけなので、スコープ内にどのようなタイプの「関係」がこようと全く関係がない。従って効力持続の場合は基本的にあらゆるタイプの動詞が生起できると思われる。

この文法化の過程において興味深いのは、動作持続、結果状態の持続の段階では、テイルが間接的に主述関係を持つのはテに前接するプロセス内のトラジェクターであったが、効力持続の場合は、テイルの文法的な主語がプロフィールするものがトラジェクターを含むプロセス全体 (テイルと直接関わる活性領域) になっている点である。¹⁸ このことは、どの動詞タイプにおいてもそれが表す行為・出来事が完了していることを表していることから分かる。例えば動作持続を表す「太郎がイスを壊している。」のような達成動詞も「太郎は幼い頃このイスを壊している。」のような効力持続として使われると、その解釈は、イスを壊している途中の段階にあり、壊れるという結果はまだ起こっていないという意味ではなく、イスを壊す行為もイスが壊れるという状態変化も完了していることを表す。この理由は、効力持続タイプがよく過去を表す副詞表現と共起することと、タの中立形としてのテの機能から導き出せるのではないかと思われる。

(21) の例を考えてみよう。

- (21)a. 3 日前に宿題を終えた。
b. 今宿題を終えた。

(21) が示すように、タは共起する副詞のタイプによって過去とも完了とも表せる。効力持続タイプがよく過去時を表す副詞表現と一緒に現れることから、効力持続の方はテが過去を表す機能をしているようである。従って発話時の段階ではすでにテに前接する「関係」が表す出来事は全て起こっていることになる。このタの機能と主体化によって起こった文法化により、いわゆる過去に起こった出来事を現在に関連付けて捉えるとか、回顧的といった意味が生まれてくるのであろう。これに対し、動作持続、結果状態の持続の方は完了を表すタが機能しているのではないかと思われるが、このことと「イスを壊している」が対象の状態変化まで表さないことの関係については今後もう少し吟味する必要がある。

さて、本稿では現時点まで状態持続についてはほとんど触れてこなかった。

(22) のような状態持続は、金田一 (1950) 以降よく言われているように、常にテイルと結びついた形で現れるものである。この点で本稿で扱った他の 3 つのタイプとは異なる特異な例である。

- (22)a. 彼は芸にたけている。
b. あの山は高く聳えている。

しかし、基本的には結果状態の持続に現れる到達動詞の例とは変化後の状態の持続という点で同じように思われる。ただし (23) のように、結果状態の持続は、結果状態に至る変化自体を表すことができるが、状態持続はできない点が異なる。

- (23)a. A: 金魚が死んでるよ。
B: そうなんだ。今朝死んだみたいなんだ。
b. A: あの山は高く聳えているねえ。？いつ聳えたんだろう。

山が聳える過程を我々は目にすることはできないので、概念化の過程において変化の部分は直接的スコープの外に背景化されてしまい、変化後の状態の

みスコープ内に残った形になると思われる。従って概念化の過程において状態のみが関わることになり、このためもっぱらテイル形の形でしか現れないのだろう。結果状態の持続の場合はプロフィールされはしないが、変化の部分が直接的スコープ内に残っている。

4. おわりに

本稿ではテイルの主なタイプ4つを取り上げ、テイルが概念化される過程の認知処理を重視し、それが4つのタイプの解釈に反映されていることを見た。これによってテイルが持つ複数の解釈が統一的な視点から捉え直せたのではないと思われる。ただし、テイルの事例にはここで取り上げたもの以外にもまだまだ様々な下位範疇的なものが存在する。今後そのような例も本稿での立場からどのように捉えられるのかを検討する必要がある。

註

1. 三原(1997)で言われているように、このタイプは必ずしも過去の出来事に限定されるわけではないようであるが、本稿では過去の出来事に限定したいわゆる経験として扱われるものに分析の対象を絞ることにする。
2. プロファイルというのは、「外界」の中の指示物という単なる外界の事物と記号の間の指示関係を表すような伝統的な意味で使われているものではなく、認知主体の解釈によって捉えられた対象を指すことである。さらなる伝統的な「指示(reference)」との違いは、単にモノだけでなく、関係概念もプロフィールすることができるという考え方を取ることである。
3. 存在物(entity)とはモノや関係両方を含んだ上位概念を表す。また、領域の形成においてはその中の存在物を順次の走査(sequential scanning)をすることによって互いに関連付ける認知操作が関わっている。例えば「本」の場合、本を構成する存在物間における関連付けの認知走査が行われ、それによって本全体を含む領域が形成され、この領域がプロフィールされる。順次の走査については以下本文で説明する。
4. 図1に表されている概念内容は言うまでもなく、認知ドメインに存在し、直接的スコープに限定されたものとして表示しているが、認知ドメイン、スコープの表示は省いてある。
5. このように複数の存在物間の関係をプロフィールするときにその存在物間において相対的により認知的際立ちのあるものとその次に際立ちのあるものが区別される。前者をトラジェクター(trajector)、後者をランドマーク(landmark)と呼び、それぞれtr、lmのように表記される。ここで反映されているのが「プロフィール部内の構造に際立ちの違いを与える能力」である。トラジェクター、ランドマー

クはモノだけでなく、関係概念にも使われる概念である。トラジェクター、ランドマークはあらゆるレベルに現れる概念であるが、文レベルではトラジェクターが主語、ランドマークが目的語として具現化される。これは、認知文法では主語、目的語という文法関係を際立ちの違いによって区別しており、より際立ちの高いものが主語として、そして次に際立ちのあるものが目的語として表されると考えているからである。トラジェクターとランドマークを区別する理由の一つに、概念的 content (conceptual content) やプロファイル部は同じでも、トラジェクターとランドマークの配置の仕方の違いが言語表現の表す意味の違いに反映されるケースがよく見られるということがあげられる。この具体事例については Langacker の一連の研究を参照されたい。

6. 走査における認知処理過程は実際は非常に細かな、そして複雑な手続きが関わっている。詳細は Langacker (1987) の第 3 章を参照されたい。
7. もちろん各段階におけるコンポーネントとその前の段階のものとの間の相違が認識されず、結果として変化のない同じ状態が続く場合もあるが、この場合も走査は行われていることに注意しておく必要がある。
8. 時間の概念に関しては、認知文法では 2 種類の時間を設けている。一つは時間軸に沿って出来事が起こっているときの時間 (conceived time) で、概念化の対象となる、つまり直接的スコープ内にあるものである。図 1 (d) における矢印がこれに相当し、 t と表記される。もう一つは認知主体が対象を概念化するときに伴う (認知) 処理時間 (processing time) である。これは T と表記される。
9. 完了プロセスは直接的スコープ内で境界を持ち、時間軸に沿った変化を表すもので、未完了プロセスは、直接的スコープ内で境界がなく、スコープを越えた拡がりを持つ。またその内部構造は均質的である。
10. 鈴木 (1976)、寺村 (1984)、山梨 (1995) 等。
11. 「特定化」とは、より上位レベルのカテゴリーに属する抽象的な構造をより下位レベルのカテゴリーにおける具体的なものとして表すことである。つまりスキーマをより具体化することである。
12. このような文法化の説明は突拍子もないことではなく、Langacker (1999) では英語の *be* 動詞に相当するスペイン語の相動詞の文法化の過程に同様の説明を与えている。また、ここではもっぱら自動詞文を例に取り上げて説明してきたのでスキーマもそのようになっているが、基本的な部分は他動詞文のスキーマもこれと同じ構造となる。
13. この例としては、「ロケットが月に近づいている。」などがあげられる。
14. 三原 (1997) では、生成文法の立場からテイル構文を埋め込み文として捉えている。そして「太郎が歩いている」のような動作持続と「木が倒れている」のような結果状態の持続は、同じ埋め込み構造でも、前者が繰り上げ (raising)、後者がコントロール (control) の関係になっているとして区別している。本稿では、結果状態の持続もトラジェクターがイールによって制約されずどのようなものでも生起で

- きるといふ点で「透明」な状態になっていると考える。従ってコントロールというより繰り上げのタイプとして考えることにする。ちなみに認知文法の立場では、コントロールと繰り上げは透明性の程度に関わるスケール上の両極に位置し、その間は段階性が見られるもので厳密に境界を持つものではないと考える。
15. 認知文法からの受動文の詳しい分析については Langacker (1990, 1991) 等を参照のこと。
16. 図8は図6をベースにしている。図6のときはもっぱら自動詞文を例にしてスキーマ表示をしていたが、ここでは他動詞文を含むより一般的な表示のためにモノが存在物と何らかの関係を持つことを表すスキーマ表示にしてある。存在物(entity)はモノ、関係両方を含む概念であることを思いだしてほしい。従って自動詞の時は下の四角は関係を表し、他動詞の時はモノを指すことになる。
- また、図の時間軸上にある長方形のボックスは、発話時を指すものとする。
17. プロファイルと言語化の関係は一対一対応の関係ではない。プロファイルされているものは言語化されるが、その逆は真ではない。従って直接的スコープ内でない主体的なものが言語化に反映されても全く矛盾はしない。
18. Langacker (1999)では、文法化の過程で主体化が起こる場合にトラジェクター／ランドマークの配置には影響しないと述べている。効力持続のテイル構文の場合はトラジェクターが活性領域に移っている。これはタの中立形のテの機能によるものと思われるが、他の主体化の過程においてもトラジェクター／ランドマークの配置に影響があるのか確かめる必要がある。

参考文献

- Croft, William. 1991. *Syntactic Categories and Grammatical Relations*, The University of Chicago Press.
- 藤井 正. 1966 「動詞+ている」の意味, 『国語研究室』第5号, 金田一春彦(編)に採録
- 池上嘉彦. 1981. 『「する」と「なる」の言語学』大修館書店
- 影山太郎. 1996. 『動詞意味論』くろしお出版
- 金田一春彦. 1950. 「国語動詞の一分類」, 『言語研究』第15号, 金田一春彦(編)に採録
- 金田一春彦(編). 1976. 『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房
- 工藤真由美. 1995. 『アスペクト・テンス体系とテキスト』ひつじ書房
- Lakoff, George. 1987. *Women, Fire, and Dangerous Things*, The University of Chicago Press.
- Langacker, Ronald W. 1990. *Concept, Image, and Symbol*, Mouton de Gruyter.

- Langacker, Ronald W. 1987/1991. *Foundations of Cognitive Grammar*, Vol. 1/2, Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. 1995. "Raising and Transparency," *Language* 71.
- Langacker, Ronald W. 1998. "On Subjectification and Grammaticization," *Discourse and Cognition*, Stanford.
- Langacker, Ronald W. 1999. *Grammar and Conceptualization*, Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald W. 2000. *A Course in Cognitive Grammar*, ms.
- 益岡隆志. 1987. 『命題の文法』くろしお出版
- 三原健一. 1997. 「動詞のアスペクト構造」, 『ヴォイスとアスペクト』研究社出版
- 中村芳久. 1993. 「構文の認知構造ネットワーク」, 『言語学からの眺望』九州大学出版会
- 中村芳久. 2000. 「認知文法から見た語彙と構文：自他交替と受動態の文法化」, 『金沢大学文学部論集言語・文学篇』第20号
- 仁田義雄. 1997. 『日本語文法研究序説』くろしお出版
- 奥田靖雄. 1978. 「アスペクトの研究をめぐる」(上・下), 『教育国語』53号, 54号
- Pustejovsky, James. 1991. "The Syntax of Event Structure," *Cognition* 41.
- 柴谷方良. 1978. 『日本語の分析』大修館書店
- 鈴木重幸. 1976. 「日本語の動詞のすがた(アスペクト)について—スルの形と～シテイルの形—」金田一春彦(編)『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房
- 鈴木重幸. 1976. 「日本語の動詞のとき(テンス)とすがた(アスペクト)—～シタと～シテイター—」金田一春彦(編)『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房
- 高橋太郎. 1976. 「すがたともくろみ」金田一春彦(編)『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房
- 竹沢幸一. 1991. 「受動文、能格文、分離不可能所有構文と「ている」の解釈」, 仁田義雄(編)『日本語のヴォイスと他動性』くろしお出版
- Tenny, Carol L. 1994. *Aspectual Roles and the Syntax-Semantics Interface*, Kluwer Academic Publishers.

- 寺村秀夫. 1984. 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
- Uehara, Satoshi. 1998. *Syntactic Categories in Japanese: A Cognitive and Typological Introduction*, Kurosio Publishers.
- Vendler, Zeno. 1967. *Linguistics and Philosophy*, Cornell University Press.
- 山梨正明. 1995. 『認知文法論』ひつじ書房
- 山梨正明. 2000. 『認知言語学原理』くろしお出版
- 吉川武時. 1973. 「現代日本語動詞のアスペクトの研究」, 『Linguistic Communications』, 金田一春彦(編)に採録
- 吉川千鶴子. 1995. 『日英比較動詞の文法』くろしお出版